台大日本語文研究第 18 期
2009 年 12 月，頁 21-36
2009-10-27 收稿，2009-12-11 通過刊登

關於詩人石川啄木誕生之諸問題

太田登*

摘要

近年來日本近代文學研究受到文化研究（Culture Studies）的影響，文學作品或作家主體本身之研究，呈現被驅至幕後的傾向。本稿主要考察明治 36 年 12 月《明星》雜誌中，詩人石川啄木（1886-1912）以雅號「啄木」初次登場之經過。以往的說法是，雅號「啄木」爲《明星》主編者與謝野鐵幹命名之；而現在則是以岩城之德所提出的啄木自我命名說爲定論。不過竊以爲「啄木」之雅號是鐵幹和啄木兩人共同合作命名的。本稿企圖藉由重新探討雅號命名之問題，考察「作品」和「作家」的關係，進而反省此考察在文學研究中所具有之意義。

關鍵詞：雅號、啄木、鐵幹命名說、啄木命名說、合作說

* 台灣大學日本語文學系教授、天理大學名譽教授

Queries on the Birth of Poet Ishikawa Takuboku

Ota Noboru*

Abstract

The recent trend of the so-called cultural research by the Japanese contemporary literature research is on the detailed probing in the literature creation or on the writer's background. The focus of this paper is to probe into the poet who has an elegant name, "Takuboku", and has his premier appearance in the 1903 December edition of the "Myojo" -Ishikawa Takuboku (1886-1912). Some say name "Takuboku" was named by the master of the "Myojo"- and Yosono Tekkan while Iwaki Yukinori believed it was Takuboku whom had given himself of such name. As for me, I would think it was the name under the collaboration of Tekkan and Takuboku. But the question I would like to raise is the meaning of probing into the relationships between the "composition" and the "writer" in the research of literature through the discussion of elegant names.

Keywords: Elegant name, Takuboku, Naming by Tekkan, Naming by Takuboku, collaboration theory.

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University; Honorary professor of Tenri University

詩人石川啄木の誕生をめぐる問題

太田登*

要旨

近年の日本近代文学研究は、いわゆるカルチュラル・スタディーズによって、文学作品や作家主体そのものが後景に遠く追いやられる傾向になっている。本稿は、石川啄木（1886-1912）という詩人が、明治 36 年 12 月の『明星』にはじめて「啄木」という雅号で登場したことについて考察するものである。従来、『明星』の主宰者である与謝野鉄幹が命名したという説があったが、現在では岩城之徳による啄木じしんの命名であるという説が定説化されている。私見では、鉄幹と啄木との合作であるという結論になるが、その雅号問題を再検討することによって、「作品」と「作者」との関係性を考察するということが、文学研究においてどのような意味があるのかを、問い直したいというもくろみがある。

キーワード：雅号、啄木、鉄幹命名説、啄木命名説、合作説

* 台湾大学日本語文学科教授、天理大学名誉教授

詩人石川啄木の誕生をめぐる問題

太田登

一、はじめに

日本近代文学研究において「作品」が「テクスト」と言い換えられるようになり、1970 年代の作品論がテクスト論に移行し、それが文化論、文化研究によって文学研究のパラダイムが構築されるというポストモダニズム現象が蔓延した 1980 年代いこう、日本近代文学研究じたいは学際的という美名のもとにカルチュラル・スタディーズとなった。[1]いま問い直すべきは、あらためて「作家」「作者」の存在を「作品」の前景に登場させることによって、「作品」そのものの内部生命を蘇生させることではないだろうか。もとより「作者」は全知全能者として「作品」を決定するものではない。啄木研究にかぎれば、伝記研究や伝記的調査の成果によって「作品」分析が左右される傾向があることは否めないが、すでに拙稿「歌集『一握の砂』の表現方法について―〈失敗の伝記〉への志向―」（天理大学国文学研究誌『山邊道』第 51 号、2008 年 2 月）で論及したように、『一握の砂』という歌集は、石川一という一人の都市生活者を主人公にした天才詩人としての石川啄木の〈失敗の伝記〉であった。別言すれば伝記的事実によって「作品」を読むのではなく、「作品」世界の言語的文脈によって詩人の〈失敗の伝記〉を読むことに意味がある。

本稿は、『あこがれ』という詩集によって誕生した詩人啄木における〈雅号〉の問題を考察しながら、「作者」と「作品」との関係性を問い直すというもくろみをもつものである。

---

[1] 最近のカルチュラル・スタディーズにかかわる研究成果として、文学と視覚との関係を考察した中川成美『モダニティの想像力―文学と想像力』（2009 年 3 月、新曜社）が注目される。なお、日本近代文学会関西支部 2009 年度春季大会では、「文学研究における継承と断絶」というテーマのシンポジウムが開催され、1970 年代いこうの日本近代文学の研究状況について議論された。その成果は和泉書院からブックレットとして 2009 年 11 月に刊行される予定である。

二、「啄木」はいかに誕生したか

（一）「石川啄木」という自意識

啄木は明治 41 年 1 月 3 日の「日記」につぎのようにのべている。

> 尤も、新詩社の運動が過去に於て日本の詩壇に貢献した事の尠少でないのは後世史家の決して見遁してならぬ事である。（略）新体詩に於ての勢力は、実行者と云ふより寧ろ奨励者鼓吹者の体度で、与謝野氏自身の進歩と、斯く云ふ石川啄木を生んだ事（と云へば新詩社で喜ぶだらうが実は自分の作を常に其機関誌上に発表させた事）と其他幾十人の青年に其作を世に問はしむる機会を与へた事が其効果の全体である。

明治 41 年の『明星』の終刊にあたって、新詩社の運動において「石川啄木」という詩人を生んだことは文学史的に意義があると強調することは、同時に詩人啄木の誕生にとって、鉄幹および『明星』は切り離すことができない重要な文学的因子であるという証明にもなる。

ふりかえれば、少年石川一は「血に染めし歌をわが世のなごりにてさすらひここに野に叫ぶ秋」(『明星』明治 35 年 10 月）の歌をもって、『明星』に初登場したが、そのときの雅号は「白蘋」であった。[2]この「血に染めし歌」はかれの文学的出発を記念する意味をもち、これをもってかれは盛岡中学校を中退し、上京することになるが、その自意識は「理想」的世界に浮遊していた。17 歳の文学少年が東京という大都会の「現実」的生活のまえに敗北することはたやすいことであった。

明治 36 年 2 月に父に伴われて帰郷した文学少年は、故郷の禅寺で療養につとめるかたわらワーグナー研究に専念する。ワーグナーの「愛」の哲学によって、自己発展の意志と自他融合の意志とを一元化した天上的宇宙的「愛」の理念を修得した少年は、堀合節子との

---

[2] 拙論「啄木「血に染めし」歌の成立について」（天理大学国文学研究誌『山邊道』第 25 号、1981 年 3 月、『啄木短歌論考―抒情の軌跡』1991 年 3 月、八木書店に所収）で、「血に染めし」歌が、『明星』10 月号に掲載されるにあたって、「石川白蘋（東京）」という署名であったことに、自己の命運に賭けるかれのしたたかな決意がうかがえることを論証している。

恋愛体験をゆるぎのないものにしながら、詩人としての活路を開こうとした。その年の 10 月下旬から 11 月上旬にかけて詩作に励み、11 月 18 日の締め切りに間に合うように、鉄幹のもとに詩編を送ったにちがいない。そして明治 36 年 12 月の『明星』に、はじめて「啄木」の雅号で「愁調」5 編（「杜に立ちて」「白羽の鵠船」「啄木鳥」「隠沼」「人に送れる」）が掲載された。ここでは詩人啄木の誕生にかかわりの深い「啄木鳥」を紹介しておこう。

「啄木鳥」

いにしへ聖者が雅典の森に撞きし、
光ぞ絶えせぬ天生「愛」の火もて
鋳にたる「巨鐘」、無窮のその声をぞ
染めなす「緑」よ、げにこそ霊の住家。
聞け、今、巷に喘げる塵の疾風
よせ来て、若やぐ生命の森の精の
聖きを攻むやと、終日、啄木鳥、
巡りて警告夏樹の髄にきざむ。

往きしは三千年、永劫猶すすみて
つきざる「時」の箭、無象の白羽の跡
追ひ行く不滅の教よ。――プラトー、汝が
浄きを高きを天路の栄と云ひし
霊をぞ守りて、この森不断の糧、
奇かるつとめを小さき鳥のすなる。

（二）詩人「石川啄木」の誕生の意義

苛酷すぎる「現実」と闘う超俗の詩人が、まさに「啄木鳥」の〈啄木鳥〉であり、〈小さき鳥〉であった。この四四四六調のソネット詩「啄木鳥」の詩的世界は詩人啄木の誕生を明示するものであるといえるが、つぎの書簡の文脈からも昂揚した詩人意識を読みとることができよう。

昨秋 11 月の初め、病怠るにつれて我が終生の望みなる詩作の事

に思い立ち、ふとしたる動機より、一の新調を発見し、爾後営々として人知らぬ楽しみの中に筆を進め居り候。12 月の号、並びに新年のそれにて、数篇を「明星」誌上に載せ候しが、よく先生の御一顧を値せしや否や。(明治 37 年 1 月 13 日、姉崎嘲風あて)

小生詩作の事を初めてより僅かに三ヶ月に満たざるの現時、種々の格調を試むるは或は修養のみちにあらざるべきかとも存じ候へど、自己の目には瓦礫を列ねても猶明珠と見るなる稚き芸術家の自惚、時としては我乍ら不埒の児とあきれ申候。(略)尚詩作の事に就き一言申上度きは、嘗て試みたる四四四六の新調の外に、近来また五六六を一句とする最新調を発見しえたる事に御座候。(明治 37 年 1 月 27 日、姉崎嘲風あて)

たゞ、大兄らの花々しい御活動に尾して、私もこの後は一意美の自由のために闘ひ、進んで、雑兵乍ら名誉の戦死……失敗の伝記を作りたいのであります。申すも小癪でありますが、私は、詩神の奴隷の一人としてこの世に生れたと信じて居ります。詩は我生命である。(略)私の用ひている作詩上の格調は、従前の階調の外に、四四四六調と五六六調の二新体でありますが、鉄幹君は前者を評して有明君の四六七調よりも有望だと申しました。[3](明治 37 年 3 月 12 日、金田一京助あて)

これらの書簡に表出された詩人意識の覚醒は、近藤典彦「詩人啄木誕生」(『国際啄木学会東京支部会報』第 15 号、2007 年 4 月)が綿密に論証しているように、節子との恋愛が成就したことが大きな要因であると考えられる。と同時に注目すべきことは、「名誉の戦死」「失敗の伝記」という詩人像もしくは詩人観にある。いうまでもなくそれは後述するように明治 35 年 10 月末の上京時に鉄幹によって洗脳された詩人意識の再燃であった。

[3] 与謝野晶子も「啄木の思ひ出」(『新編石川啄木全集月報』1938 年 6 月、改造社)で、「平野万里さんに聞いた話であるが、或時上田敏氏が森鴎外先生を千駄木へお訪ねになつて、詩人に対する評を交されたさうで、上田氏が何と云はれたのか、森先生が、私はさうとは思はない、泣菫に有明は勝り、有明に啄木は勝ると思ふと云はれたさうであつた。」と証言している。

三、雅号「啄木」の命名は誰か

（一）鉄幹命名説

『石川啄木事典』（2001 年 9 月、おうふう）に所収の「雅号」の項目（望月善次）によれば、「鉄幹発案説もあった」が「現在では、啄木自身による説が有力である。」とあり、おなじく「年譜」（望月善次）でも、「鉄幹発案説」もあったが「現在、啄木自身考案説が有力である」とある。[4]「啄木」という雅号が師にあたる鉄幹によって命名されたという根拠は、つぎの鉄幹じしんの証言にある。

> 私達は啄木君にその喜びの手紙を書いて送り、また其等の詩を殆ど全部翌月の「明星」に載せた。それまでの雅号は「白蘋」であつたが、私は其の寂しい雅号が君に不似合なやうに思つて居たので、此詩の発表を機会に新しく雅号を択んで付けよう、確かに此詩が詩人たる君の地歩を決定する最初の意義あるものだと考へたので、その詩の中にある「啄木鳥」の一編が君の其頃の心境を尤も正直に表現した佳作だと見て、私は「啄木」と云ふ雅号を付けて「明星」に載せたのであつた。其頃は詩歌を載せる専門の雑誌が少なく、詩人も今日のやうに専門の名家がゐられなかつたので、我々門外漢同志の雑誌が案外に世の注目を引き、其れに載せた素人の啄木君の詩が忽ち読者を驚かした。第一に先輩と友人達から「石川啄木とはどんな人ですか」と問はれるのであつた。それは啄木君がまだ十七歳の秋の作であつた。(「啄木君の思ひ出」『石川啄木全集』月報 1、昭和 3 年 11 月、改造社)

この鉄幹の証言によって、その後の「恩師与謝野氏に乞ひて得たる雅号」という金田一京助『石川啄木』(昭和 9 年 3 月、厳南堂書店)、「与謝野氏の撰号、啄木の署名、この時より用ひらる」といい、「詩集『あこがれ』の題名は与謝野氏の名付けてくれたものだそうだが、」

[4] 最も新しい啄木評伝として注目される、三枝昂之『啄木―ふるさとの空遠みかも』（2009 年 9 月、本阿弥書店）は、「(略) 随想「無題録」で啄木は改名の理由を、樹を敲く啄木鳥の音が好きで、その響きを聴くと心が慰められるから、「取つて以て名付くる者斯くの如きが故のみ」と説明している。つまり命名は啄木自身と記述しており、今日の研究はこれに従っている。」とのべている。

ともいう石川正雄『父啄木を語る』（昭和 11 年 4 月、三笠書房）をはじめとする啄木評伝は鉄幹命名説にしたがい、伊藤整『日本文壇史』第 8 巻（昭和 41 年 10 月、講談社）の記述も鉄幹命名説を踏襲している。鉄幹命名説は「啄木伝の定説」（岩城之徳）とされた。

（二）鉄幹命名説への異論と反論

この定説化された鉄幹命名説に最初に異論を提起したのが岩城之徳であった。岩城じしんは「石川啄木」（岩波講座『日本文学史』第 13 巻、昭和 34 年 2 月）で、「この雅号は啄木自身の命名によるものと考えてよい」という新説を提起していらい、『人物叢書石川啄木』（昭和 36 年 2 月、吉川弘文館）、「啄木の雅号をめぐる問題」（北海道大学国文学会誌『国語国文研究』第 50 号、昭和 47 年 10 月）、『新装版人物叢書石川啄木』（昭和 60 年 7 月、吉川弘文館）などでその論証の補強につとめた。しかしその岩城説にたいする反論が石井勉次郎『私伝石川啄木詩神彷徨』（昭和 47 年 4 月、おうふう）によって提起され、鉄幹命名説を再説した。岩城は『啄木評伝』（昭和 51 年 1 月、學燈社）に『国語国文研究』に発表の「啄木の雅号をめぐる問題」を再録することで、石井説を批判したが、その岩城説にたいする石井による再批判「反論一束（1）―岩城之徳への勧告状―」（『啄木文庫』第 10 号、1986 年 3 月）があった。

岩城・石井の両者の見解を要約すれば、以下のようになろう。

【岩城説】

①鉄幹の「啄木君の思ひ出」は、啄木の短歌を否定しているが、実際には『明星』「短歌合評」で高く評価し、さらに従前の「白蘋」という雅号がふさわしくなく「啄木」という雅号を命名したというが、明治 36 年 12 月の『明星』では「愁調」は「啄木」であるが、短歌作品は「石川白蘋」という雅号のままであるなど矛盾が多く、信用できない。

②「啄木鳥」以前の明治 36 年 7 月の『明星』に「ほゝけては藪かげめぐる啄木鳥のみにくきがごと我は痩せにき」という短歌を発表し、明治 36 年 10 月 29 日の野村長一あての書簡に「啄

木庵」という署名を使用していることなどは、啄木じしんが命名した動機として認められる。

③明治 36 年 10 月 25 日の『岩手日報』に掲載の小林茂雄（滋夫）の「啄木鳥庵雑詠」という俳句作品は、白蘋から啄木への雅号の転換が啄木の意志によることを示す有力な証左である。

④昭和 41 年 10 月に宮内庁書陵部で発見された「無題録」（『岩手日報』明治 36 年 12 月 18 日、19 日）は、「白蘋から啄木への雅号の転換の事情を克明に伝えており、これまでの雅号問題に終止符を打つ貴重な文献である」とし、「強い説得力をもち、雅号考証の文献として不朽の生命をもっている」。

【石井説】

①鉄幹の「啄木君の思ひ出」は、たしかに厳密な考証文献としては弱点がある。しかし鉄幹は情理をつくし、具体的に雅号選定の事情を語っている。

②「無題録」は自家宣伝の意図を盛りこんだもので、とくに後半部冒頭の雅号の由来を記述する文脈は粉飾臭濃厚な「美文」であり、これを考証材料にすることは危険である。

③明治 37 年の年賀状の小林あてには「啄木」であるが野村あてには「白蘋」である。この新旧雅号の混用は新雅号への心理的な受身性が読みとれる。

以上、岩城、石井の両説の相違点を要約したが、雅号に関する問題点は大きくふたつに絞ることができよう。その第一は鉄幹の証言が偽証といえるのかということ、第二は新出資料の「無題録」が決定的証明となるのかということである。

第一については結論からいえば、今井泰子『石川啄木』（昭和 49 年 4 月、塙書房）が「鉄幹の証言を偽証と見る必要もないだろう。原稿郵送に際して啄木は当然書簡を添えたはずである。その中に改号に関して相談めいた表現があれば、鉄幹が己の命名と記憶することはありうることである」と明言するように、雅号命名に際して鉄幹の関与があったと見るのが妥当である。第二の「無題録」はたし

かに詩人啄木誕生の由来にかかわる重要な資料であるが、しかしその文脈には「自家宣伝の意図」が読みとれるだけではなく、鉄幹という存在が深く関与していることを認めざるをえない。

四、ソネット詩「啄木鳥」と随想「無題録」の関係

（一）「無題録」は詩人啄木誕生の告知の書であった

いわゆる雅号問題の分岐点に位置する「無題録」の後半部冒頭の一節を引用しておこう。

> 村閭の野老一日草堂に訪ひ来つて曰く、君嘗て家畔の沼堤に夏蘋の清高を愛して白蘋の号ありき、今之を改むるは何の由る所あるかと。予答へて曰く、窓前の幽林坎々として四季啄木鳥の樹杪を敲く音を絶たず閑静高古の響、真に親しむべし。（略）時に寒林を洩るゝ音あり、近くまた遠く、風に従つて揺曳する坎々の響、忽然として予また幻想に酔ふが如く、瞑目莞爾として一人息を殺す事多時。題して『啄木鳥』と云ふ一篇のソネットは此際に成りたる者なり。（「岩手日報」明治 36 年 12 月 18 日、19 日）

この「無題録」の後半部冒頭の一節を読むかぎり、詩編「啄木鳥」の成立と「啄木」という新しい雅号の誕生とが直結していることは明白である。明治 36 年 7 月の『明星』に「ほゝけては藪かげめぐる啄木鳥のみにくきがごと我は痩せにき」という短歌が発表され、しかも同年 10 月 25 日の『岩手日報』に小林茂雄（滋夫）の「啄木鳥庵雑詠」という俳句作品があるだけではなく、「啄木庵とは杜陵の北五里石川白蘋のいそしむ紅葉てりはふ幽遼の地に候」という詞書きが付されている。さらに 10 月 29 日の野村長一あての書簡に「啄木庵」という署名を使用していることなどからも、従来の「白蘋」の文芸サロンがほぼ 10 月ごろには「啄木鳥庵」「啄木庵」としてかれらの周辺では親しまれていたのであろう。したがってまず何よりも身近な文学仲間に詩人啄木誕生の告知が必要であった啄木は、『明星』に「愁調」が発表された直後の 12 月 13 日の小林茂雄あて

の書簡に、それまでの「白蘋」という号ではなく、「啄木老」という署名を使ったのであろう。つまりいわば地方的には認知されていた旧来の「白蘋」という号から新しい「啄木」へという雅号の誕生は、『明星』派の象徴詩人として飛翔するために不可欠な条件であった。しかしそれは「『明星』の「愁調」御覧被下候はば御高評願上候。鉄幹は小生の四四四六調を、有明のより望み多き詩形ならんと申越し候」と書きとめるように、鉄幹という後ろ盾を必要にしていたことがわかる。

（二）詩人啄木誕生には鉄幹の評価が必要であった

「無題録」は「過去一歳を回想して、先づ吾人の眼底に映じ来る者は、詩壇の一大飛躍なり。」ではじまる後半部の詩壇の動向を語る文脈に主眼がある。薄田泣菫、蒲原有明などの活躍を紹介し、「之を一貫して本年特色とすべきは各自が詩調の研究に全力を濺ぎたるにあるが如し。鉄幹氏近者予に書を寄せて、[5]春来の研究に成りたる或る新調を、来らんとする新年号の『明星』に公にすべしと云へり、生気羨むべき哉。」とのべていることは、鉄幹の存在を無視して詩人啄木の誕生は成立しえないことを意味している。さらに「予も亦孤舟を放つて此澎湃たる詩壇の新潮に棹ささんとする者、抱懐する所の野心は暫く秘して言はじ。若し徹宵苦茗を啜つて詩を談ぜんとする者あらば来つて渋民村裡の小庵を叩け。痩骨の主人細腕を撫して、高歓無私心、病余の勇を鼓して舌戦するを辞まざらん。」という「無題録」の結語には、「詩壇の新潮に棹ささんとする」新進詩人の並々ならぬ意気込みが読みとれよう。

この詩人としての使命感は、「氏曰く、文芸の士はその文や詩をうりて食するはいさぎよき事に非ず、由来詩は理想界の事也直ちに現実界の材料たるべからずと。又云ふ、和歌も一詩形には相異なけれども今後の詩人はよろしく新体詩上の新開拓をなさざるべからずと。又云ふ、人は大なるたゝかひに逢ひて百方面の煩雑なる事条に通じ

[5] 鉄幹の「啄木君の思ひ出」にも、「私達は啄木君にその喜びの手紙を書いて送り、また其等の詩を殆ど全部翌月の『明星』に載せた。」とあり、「愁調」発表前後に詩作に関する書簡の往復が両者のあいだに交わされたことを証明している。

雄々しく勝ち雄々しく敗けて後初めて値ある詩人たるべし、と。又云ふ、君の歌は奔放にすぐと。」（明治 35 年 11 月 10 日「日記」）という鉄幹によって強烈に洗脳された詩人意識が再燃したものであった。たしかに「無題録」は詩編「啄木鳥」の自注的性格があった。その意味では、私的領域、地域的領域に限定した詩人啄木誕生の告知ではなく、公的領域、全国的領域による告知でなければならなかった。そのためにこそ新進詩人「啄木」の誕生には、『明星』の主宰者である鉄幹の存在および評価が不可欠であったといえる。

五、詩人「啄木」誕生と雅号問題—結びにかえて

『石川啄木事典』の「書簡」の項目（池田功）で、池田功が書簡の署名を「白蘋」から「啄木」へ一本化する時期が明治 37 年であると指摘するのも「啄木」誕生の名実化にほかならない。しかし「啄木」への一本化が図られたとはいえ、「白蘋」から「啄木」への雅号の変更はあまりにも倉卒であったように思われる。実際に金田一や鉄幹の証言にもあるように、「白蘋」と「啄木」とが同一人物であると気づかなかった読者や友人がいたことは、倉卒のなかに何か必然的意図的なものがあったように考えられる。

結論的にいえば、明治 36 年『明星』11 月号の「社告」に必然的意図的な意味を見いだすことができる。「◎爾後同人中に加はれしは、山形林蔵君（伯耆）石川白蘋君（陸中）磯野良策君（筑前）等に候。」とあり、「◎十月を以て前田林外、相馬御風氏の二氏、一身上の都合にて退社せられ候。」という 11 月 1 日付けの鉄幹じしんの署名記事には、啄木の雅号問題にかかわる示唆が含まれている。いわば『明星』創刊いらいの盟友である前田林外、相馬御風、岩野泡鳴たちが離脱し 11 月に『白百合』という新しい詩歌雑誌を薄田泣菫、蒲原有明などの協力をえて創刊したことは、鉄幹にとっては少なからず穏やかならぬものがあったにちがいない。[6]したがって 36 年 12 月号の

[6] 拙論「啄木詩歌のイメージの特質—『小天地』の表紙画をめぐって—」（国際啄木学会編『論集石川啄木Ⅱ』2004 年 4 月、おうふう）で、啄木の詩集『あこがれ』の成

『明星』の「目次」に「愁調（長詩）石川啄木」とあり、「裏表紙」の広告欄の左隅上に「本号には薫、紫紅、梨雨、啄木諸氏の長詩」とあり、さらに「社告」に新年号の予告として「長詩には梨雨、蒼梧、啄木、砕雨、鉄幹等の作あり。」とあるように、あきらかに象徴詩人の新人「啄木」を広く知らしめようとする編集意図が読みとれる。[7]同人に推挙された啄木にしても、鉄幹から奔放にして創新のない短歌であると批判される歌人「白蘋」の限界を突破するためにも、別人物の詩人「啄木」の誕生によって再生を期するところがあったにちがいない。さらに今井、近藤の先行研究が指摘するように、節子との恋愛成就（婚約）へのいわばパスポートとして詩人啄木の誕生は必須要件であった。別言すれば『明星』から新人の象徴詩人を詩壇にデビューさせたいという鉄幹の思惑と、象徴詩人として再生したいという啄木の思惑とが一致したところに必然的意図があった。

鉄幹によるものか、啄木じしんによるものか、「啄木」という雅号を誰が命名したかということでいえば、鉄幹と啄木の合作であるというのが、私の結論である。石井もいうように「無題録」の文脈はあまりにも粉飾が目につきすぎる美文調である。つまり、「啄木鳥」の詩稿を送った啄木と、その詩稿を読んだ鉄幹との間で感想のやりとりがあったはずであり、それをふまえて（とくに鉄幹の所感をもとに）書かれたのが「無題録」ではなかったか。やや深入りすれば、「村閭の野老一日草堂に訪ひ来つて曰く」という「無題録」における老人との対話という設定にも鉄幹との意見交換が反映しているように考えられる。鉄幹の了解や同意を求めずに自己の意思だけで、雅号「啄木」の由来記が書かれたというよりは、少なくとも『明星』派の象徴詩人として飛翔するためには鉄幹の助言や評価が必要であったと考えるべきであろう。くりかえしていえば、前掲の金田一あ

立と前田林外らの『白百合』との関係が密接であることを論証している。

7 窪田空穂は「与謝野寛氏の思ひ出」（『日本短歌』昭和 15 年 5 月）で、「与謝野さんは、まことに優れた力量の持主で、何をされても優に三人前ぐらゐの仕事は楽々とやつてのけられた。『明星』の編集も傍にあつて親しく見ることが出来たが、詠草の選も、添削、編集、校正等全く一人の手で見る間に片づけて行かれた。」とのべている。

ての書簡に告知された詩人意識には、35 年 11 月にはじめて対面した鉄幹の存在がきわめて密接にかかわっていた。つまり、「啄木」という新しい雅号が認知（公認）されるか否かは、ひとえに『明星』の主宰者であり実質的編集者でもある鉄幹の判断によるものであったといえよう。

さらに本稿の冒頭でのべたように、「啄木」という詩人の誕生にとって、鉄幹と『明星』とは一元的な価値体系のもとにあったといえる。そうであるがゆえに今井泰子もいうように一方的に鉄幹の証言を偽証とみなすのではなく、『明星』という文学的広場にあって鉄幹と啄木とがきわめて刺激的に交差した文学的地点があったことを積極的に見直すべきであろう。

付記：

本稿は「2009 年台大日本語文創新国際学術研討会」（国立台湾大学日本語文学系、2009 年 9 月 25 日）における講演の草稿を補訂したものである。各位のご批正をお願い申し上げます。